



医学部 看護学科 3年  
ムラマツ リナ  
村松 里奈

## 学校生活に欠かせない場所

2年生になって、医学部キャンパスに移り、より専門的な勉強をするようになってから、図書館という存在がどんどん私の生活に欠かせないものになっていきました。課題が出る度に図書館へ行き、テスト前になれば図書館へ行き、実習が終われば図書館へ行く。そんな毎日を、こちらのキャンパスへ来てからの2年間、私は過ごしてきました。WiFiやパソコンが使える、複数人が集まれるような学習室も備え、特別利用申請を行えばほぼ24時間使えるというところは、部活もバイトも勉強もと忙しく毎日を送っている私達学生にとってはとても心強く、魅力的であるように思います。

強いてひとつ、要望をあげるとすれば、特別利用時間帯に貸し出しを行ってほしいということで

しょうか。テスト期間や実習が始まると、夜遅くまで、下手をすれば図書館で朝を迎えるまで、図書館で勉強やレポートをする学生は少なくありません。その学習の中で、「これが明日どうしても必要だ!」と思う本と出遭う機会もまた少なくなないように思います。しかし、その場合、朝の開館を待たなければ貸し出しできませんが、開館時間を待ったのでは実習に間に合いません。つまり、その本の中でも本当に必要な部分だけ選りすぐって印刷もしくはノートにまとめるか、泣く泣く諦めるかという手段を取らざるを得ないのです。

図書館の方達もその時代の学生の要望に合わせて、図書館の運用を検討してくださっていることは本当に助かります。これから卒業まで、まだまだお世話になります。

## 図書館利用者の声

### 一人ひとりに 「居場所」を与えてくれる場所

総務部総務課（本学事務職員）  
ヒラタ シンタロウ  
平田 慎太郎

「利用者」の顔をして寄稿していますが、恥ずかしながら愛書家でもなく、利用実態は新聞・雑誌等を読む程度で、残念ながら「図書の館」とは程遠い目的が主です。分不相応で、すみません……。

そう言えば、学生時代はよく図書館に居た記憶があります。たくさんの蔵書に囲まれた静寂な空間は、学習も捗り、物事をまとめるには最適な場所。特に大学時代は、調べたいテーマに関する本を探すために図書館を巡ったものです。自宅にはこれまで居住・通学・通勤した地域や職場の図書館カードが眠っており、見返す度に当時が蘇り、自分の足跡のようです。

近年、公立図書館の役割を見直す動きが活発です。民間への運営委託でカフェ併設や頻繁な催事で集客する図書館、ボランティア中心の徹底した

市民参加で運営する図書館、不登校の児童へ来館を呼び掛ける図書館も。利用者を「待つ」場から「支援する」場へと変わりつつあります。

勿論、大学図書館の主な役割は、学生・教職員等への図書貸出やメディア情報・資料の収集・提供ですが、本学の図書館では、早朝開館や高校生への開放、講演会やセミナー、ミニコンサートや親子向けイベント等々、趣向を凝らした取組が多くあります。また、ラーニング・コモンズでは、議論を交わしながら勉学に励む学生が多く見られ、浸透してきたと思います。

その姿へエールを送りつつ、「もっと勉強していれば……」と反省—そんな私にも居場所を与え、温かくゲートを開いてくれるこの図書館へ敬意を表し、拙文を終えます。